

## 01-025

## 医療的ケア児のインクルーシブ教育を促進する教職員と医療専門職の連携・協働にかかわる現状と課題

山本 智子

国立音楽大学 音楽学部

日本では、出生数は減少する一方、医療的ケアを必要とする子ども（以下「医療的ケア児」）の割合が増加する傾向にある。医療的ケア児の就学先は一般の学校または特別支援学校に大別される。中央教育審議会は2010年に「障害のある子どもと障害のない子どもができるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである」という考え方を示した。2018年には、文部科学省が、切れ目ない支援体制整備充実事業として医療的ケアのための看護師配置事業を、また、学校における医療的ケア実施体制構築事業を進めることになった。6月にはまた、「学校における医療的ケアの実施に関する検討会議の中間まとめについて」が通知された。医療的ケア児が一般の学校に就学する場合、教職員と保健医療専門職の連携・協働が不可欠である。調査の過程では、教職員と看護師等の双方から相手とコミュニケーションしにくいという声が聴かれた。先行研究では、特別支援学校の調査に基づいて、学校への医療的ケアの導入当初を中心に、教職員と看護師等の双方にわかり合えない思いが生じていることが明らかにされた。本報告では、医療的ケア児の一般の学校への就学を先進的に支援する教育委員会および学校の調査に基づいて、教職員と医療専門職の連携・協働にかかわる現状および課題に関して報告する。調査の結果、教職員と、医療的ケアを実施する看護師等が直接的に接する機会が確保されていることが明らかにされた。就業前後のあいさつはもとより、口頭および書面において子どもやケアに関して報告し合うしくみが整えられつつあった。月に1回、あるいは、年に3回と開催頻度が異なるものの、教職員が参加し、医療的ケアを実施する看護師等も参加できる委員会が定期的に開催されていた。教職員の担当者については、校長等の管理職の他に、担任教諭、養護教諭、主幹教諭、特別支援コーディネーターといった違いがみられた。この他に、一般の学校における医療的ケア児の就学支援に直接的にかかわる教育委員会の担当課に違いがみられた。また、学校において医療的ケアを実施する時間や内容にも違いがあった。さらに、医療的ケアを実施する看護師等の一般の学校への派遣にかかわるしくみにも違いがみられた。これらの調査結果に基づいて、一般の学校における教職員と看護師等の連携・協働を発展させるために、看護師等の保健医療専門職の就労条件を整備する必要があることを示す。

## 01-026

## 当院小児科における家族のレスパイト目的のショートステイ（福祉型および医療型）の利用状況の実態調査

南谷 幹之<sup>1,2</sup>、早川 美佳<sup>1,2</sup>、関 真澄<sup>1,2</sup>、小関 直子<sup>1</sup>、杉原 進<sup>1</sup>、今井 祐之<sup>1,2</sup><sup>1</sup>東京都立北療育医療センター小児科<sup>2</sup>東京慈恵会医科大学小児科

## 【目的】

当院のショートステイは平成15年度「障害者支援費制度」に始まる。体調が変動しやすく追加的医療対応が求められる利用者を医療型として、そうではない利用者は受給者証を用いる福祉型としてショートステイ入院を分類している。ともに入院の目的は家族のレスパイトである。さらに検査等の医療とレスパイトを兼ねた医療入院も合わせて、レスパイト目的の入院について現状（利用回数）を知ることを目的とした。

## 【対象・方法】

対象は平成30年4月から平成30年10月の7か月間に当院小児科のショートステイ（福祉型および医療型）の利用者である。方法は利用者の居住地、出生年（年齢）、医療的ケアの内容（栄養、気切、酸素、呼吸器）について利用回数を調査した。

## 【結果】

ショートステイ利用者は252名あり、のべ868回、平均3.44 (SD2.20) 回利用されていた。利用地域は当院所在区ならびに隣接区の居住者は133名、平均3.92 (SD2.28) 回、非隣接区の居住者は119名、平均2.92 (SD1.98) 回で隣接区居住者に利用が多かった。出生年については1960-1999年が117名、平均3.66 (SD2.28) 回、2000-2018年が135名、平均3.26 (SD2.12) 回利用された。医療的ケアを要する者が149名、平均3.36 (SD2.11) 回、そうではない者は103名、平均3.57 (SD2.33) 回であった。医療的ケアの内訳は経管栄養（経鼻・胃瘻・腸瘻）が143名、平均3.34 (SD2.10) 回、非経管栄養（経口）が118名、平均3.55 (SD2.35) 回、気管切開が66名、平均3.58 (SD2.11) 回、非気管切開が186名、平均3.40 (SD2.24) 回、さらに在宅酸素（日中、夜間、終日）は32名、平均3.78 (SD1.91) 回で、非在宅酸素220名、平均3.40 (SD2.24) 回よりも利用が多かった。また、在宅呼吸器（夜間・終日）が68名、平均3.69 (SD2.05) 回、うち終日呼吸器は25名、平均4.04 (SD2.15) 回利用され、非在宅呼吸器の184名、平均3.35 (SD2.25) 回よりも多かった。

## 【結語】

当院のレスパイト目的のショートステイは隣接区の居住者に利用回数が多かったが、利用者の半数近く（47%）は非隣接区に居住していた。また、必ずしも医療的ケアを要する者に利用回数が多いわけではなかった。医療的ケアでは終日呼吸器に利用回数が多かった。家族支援の観点から在宅医療を支えていく必要があろう。